

## 機能動詞構文研究の発展系譜

荒 木 泰

1962年に H. Kolb が STZ 5/1962 に “Sprache des Veranlassens. Über analytische Kausativbildungen im modernen Deutsch” を発表して以来、いわゆる Funktionsverbgefüge に関する研究は十年余りの間に少くとも15篇がドイツだけで公けにされている。その間 Kolb の上記論文では単に、

「前置詞+(冠詞)+動名詞+動詞 という言語構造」として、特別の命名もされていなかったものが、翌1963年の K. Daniels による nominale Umschreibung、同年 P. von Polenz の Funktionsverbformel という呼び方によって、ようやく一つ概念が生じ、K. Bausch, G. Stötzel の Nominalstil という呼称を経て、1968年、H. J. Heringer の Funktionsverbfügung、同年 B. Engelen の Funktionsverbgefüge にほぼ固まり、(その間、東ドイツ V. Schmidt の Streckformen des Verbums、1971年 H. Popadić の Nominalisierung des Verbalausdrucks があるが)、1969年の A. Rothkegel、1973年の W. Herrlitz が Funktionsverbgefüge を用いているところから観ても、これが用語としてほぼ統一されたものになる可能性が大きい。

わが国では「名詞転換語法」(1968年荒木)、「名詞文体」などの訳語があり、特に後者が一般的であるが、ここでは「機能動詞構文」を用いることにする。これはこの構文での二大要素、動詞概念の名詞化と動詞の機能化を対比してみる時、最近の構造言語学的視点からいっても動詞に構文上の重点を置くのが一般的になっており、名詞を前面に出した訳語よりも一層適切と思われるからである。

さて小論の目的は、この機能動詞構文に関する研究が、過去12年間にどのような発展を遂げて来たかを概観し、今後の研究方向を探る一助としようとするものである。したがって Kolb から始めて編年的に順を追って考察してみる。

- 1) Herbert Kolb : Sprache des Veranlassens. Über analytische Kausativbildungen im modernen Deutsch, STZ 5/1962, S. 372 ff. (L 1)

この論文の主要な点については、荒木「Aktionsart-Aspekt 表現としての Nominale Umschreibung」1968年関西学院大学文学部「独逸文学研究、第11篇」(S. 9f)〔以下 L 2〕で紹介済みであるから、ここでは省略するが、それまで「名詞病」その他あらゆる悪名をきせられ批判され続けてきた機能動詞の構文に、作為態を中心とする Aktionsart 構成の新しい手段としての役割を見出した画期的研究ということができ、これを契機として、以後次々と機能動詞構文の研究が輩出することとなる。

- 2) Peter von Polenz : Funktionsverben im heutigen Deutsch. Sprache in der rationalisierten Welt, Beihefte zur Zeitschrift "Wirkendes Wort" Düsseldorf 1963 (L 3)

Karl Korn が "Sprache in der verwalteten Welt" (1959) において「管理社会に生れた言語現象」と見なしたものを、von Polenz は言語学的見地から「合理化された社会の言語現象」として、機能動詞構文もこのような社会に即応し、より精密に表現するために不可欠な、ドイツ語をより豊かなものとする言語手段であるとした。先の Kolb の論文が、Kausativum の synthetisch な表現を失ったドイツ語の当然到るべき analytisch な Kausativum 構成を機能動詞構文の中に見出したのに対し、von Polenz はさらに広く、Aktionsart そのものが analytisch な手段によって拡大され、生産的な表現方法が形成されつつあると見る。このため Duden Stilwörterbuch で "papierdeutsch"

と極め付けられ、“besser”として推奨された単一動詞による表現に疑問を投げかける。Kenntnis erhalten (bekommen) よりも erfahren, zur Kenntnis bringen よりも mitteilen, in Kenntnis setzen よりも unterrichtenの方が besseres Deutsch なのだろうか。尊敬すべき取引先を“unterrichten”などできないではないか。従来の文体批評は文学語という高い水準に基準をおいているが、日用語の要求というものは不問に付している。しかし、言語の研究は、実にこのようなところから始まるのである、というのが von Polenz の主張である。

事実 Duden Stilwörterbuch 第6版(1971)からは、このような価値判断をもった表現は一掃されてしまった。

以後発表される機能動詞構文に関する諸研究には、殆んど必ず von Polenz のこの論文からの引用や参照指示があることが示しているように、ほぼ時を同じくして出版された Daniels の次の論文と共に、機能動詞構文研究の出発点となる古典となりつつある。

3) Karl-Heinz Daniels: Substantivierungstendenzen in der deutschen Gegenwartssprache—Nominaler Ausbau des verbalen Denkkreises—Düsseldorf 1963 (L. 4)

内容の紹介は、関西学院大学「人文論究」1964年、第15巻2号、荒木『名詞転換語法と K. Daniels による研究』ですで行った。名詞化傾向という標題でありながら、ここで扱われているのは、この著者のいう nominale Umschreibung であり、名詞部は動詞的内容のものとは限らず、Luft holen, Musik machen のようなものまで含まれている。すなわち、Daniels の nominale Umschreibung は、前綴・後綴によると同様な、またはこれに替る造語手段として捉えられている。古くからある Wahl treffen にならって Anstalten—Maßnahmen—Vorsorge—Feststellung treffen を造るのは、彼によれば「生産的な派生型」であり、造語論でも取上げるべきものとなる。後の研究ほど

「前置詞＋(冠詞)＋動名詞＋機能動詞」の型に関心が絞られてくるのに対して、Daniels の場合は最も広義に解されており、約4000種の nom. Umschreibung を 264 種の動詞別に分類している。この研究の主目標として挙げられていることは、nom. Umschreibung がドイツ語の動詞体系の欠陥と間隙を埋め、様々の方法で入り込んでいることを立証することにあるが、Aktionsart, Aspekt, の文体論の面からの考察も行われており、以後現われる諸研究で一層詳細に検討される要素は、一応ここにすべて含まれているといえることができる。

- 4) Peter von Polenz : “durchführen” in der Stilnot substantivischer Tätigkeitsbezeichnung ; Muttersprache, Jg. 1963 (L 5)
- 5) — : “erfolgen” als Funktionsverb substantivischer Geschehensbezeichnung ; Zeitschrift für deutsche Sprache, 1964 Band 20 (L 6)

この両論文についても、すでにL 2 で一部紹介してあるため、ここでは省略するが、Daniels のいう広義の nom. Umschreibung の中で、最も開放的・生産的なものが、durchführen と erfolgen であり、しかも erfolgen は多くの場合 durchgeführt werden と同様であるから、ちょうど表裏の関係にあり、受働態を用いることなく Aspekt の違いを容易に表現することができる。

von Polenz がこの両動詞を個別に採り上げたのは、それだけの意義があり、後に発表される Heringer の kommen と bringen を対照した機能動詞構文に関する研究と共に、この分野での研究を一段と掘り下げたものである。

なお、機能動詞構文と受働の関係については、後掲 Kolb の “Das verkleidete Passiv” および関西学院大学文学部「独逸文学研究」第12輯、(1869) 荒木「受働の限界と Aktionsart」(L 7) を参照されたい。

- 6) K. -Richard Bausch : Der Nominalstil in der Sicht der vergleichenden Stilistik (Das franz. Vollverb und seine Transpositionen

zum Typ “Verb+ (Präposition+)(Artikel+) Substantiv” in englischen, spanischen und deutschen Prosa-Übersetzungen); Muttersprache 74. Jg. Hf. 7/8, 1964 (L. 8)

A. Lombard はすでに1930年スウェーデンで発表した論文 *Les constructions nominales dans le français moderne* において、特にヨーロッパの文化語一般に名詞化の傾向が認められるとし、比較言語的方法でこの問題を組織的に検討するよう要請している。そこに集められたフランス語の例文の中には、「名詞+動詞」の結合を外形の特徴とする名詞文体が見出されるが、これは他の言語にもあって、frz. *crier* に対して *pousser un cri*, eng. *to look* に対して *to have a look*, span. *explicarse* に対して *tener explicación*, dt. *zweifeln* に対する *Zweifel haben* のようなものである。Bausch はカミュのペスト、ジイドの田園交響曲、マルタンデュガールのチボー家など8篇のフランス語現代散文と新聞を採り上げ、その英・独・西語訳と比較して名詞化傾向を文体論の立場から分析した。

ただし四ヶ国語を同時に取扱うため、ここではフランス語の完全動詞が、他の三ヶ国語で *Nominalstil* に翻訳された場合のみに限定されている。

7) Georg Stötzel: Schwierigkeiten bei der sprachwissenschaftlichen Beurteilung des “Nominalstils”, Muttersprache 75. Jg. 1965

L 4 の Daniels の研究に対する書評という形をとっているが、同時に以後の研究に方針と多くの示唆を与えている。題名が示す通り、*Nominalstil* とは何か、という定義は以外と困難なものであり、Daniels の書 S. 14 ff. の *Definition, Abgrenzungen* の章における不備を指摘している。すでに 3) で述べたごとく、Daniels の資料収集は広範囲にわたっているが、そのため自ら定義し難い広さにまで及んでしまい、結局定義も明確でなく、しかもその定義を超える、単なる「名詞+動詞」の *lexikalisch* な組合せまで含んでしまうこ

とになっている。

また nom. Umschreibung における名詞の特徴として、「前置詞の欠落」を挙げ、Sturm laufen は mhd. ze sturme loufen の ze が欠落したものとし、その他の例を挙げているが、全体から見れば少数の例にすぎず、他の多くの場合に保たれている前置詞を無視するわけにはいかない。同じく特徴の一つとして挙げられた「語尾(変化)の喪失」もおかしなものであり、例に挙げられている Kenntnis nehmen 等は、すべて Akkusativ であるから語尾のないのは当然のことである。むしろ zum Vortrag bringen, im Kampf liegen などの Dativ において、絶対に語尾が現われないのかどうか、その方が気になるところであるが、これには触れていない。次に Inhaltsnische による分類への不満がある。例えば in Bewegung bringen は、「Bewegung」の意味内容として、「Beginn eines Bewegungszustandes」に属する in Bewegung kommen とは別の項目に分けられている。したがって文法的に興味のある bringen と kommen の対照は説明されないままとなっている。Aktionsarten による分類を試みた第8章(S 193 ff.)においても、in Verbreitung kommen など、真の nom. Umschreibung を in Frage kommen などの lexikalisch なものと区別していないため、「Beginn einer Veränderung」として一つにまとめるには無理が生じてくる。

しかし全体として見れば、Daniels の書は、いわゆる Nominalstil の問題に多くの手がかりと資料をもたらした点で重要であり、Stötzel のいう通り「注目すべき書物であり、事実多数の言語研究者の注目を浴びたのである。

- 8) Herbert Kolb: Das verkleidete Passiv—Über Passivumschreibungen im modernen Deutsch—, Sprache im technischen Zeitalter, 19/1966 (L 9)

科学技術論文・説明書その他の Zwecksprache においては、受動態を用い

る必要が生じることが多い (L 7 参照)。しかし受動態ばかりを使用して生じる単調さを避けるため、種々の手段が考え出される。(時に lassen を伴う) 再帰的表現, zu+不定詞によるもの, -bar 語尾形容詞+sein, Nom. act., (Gen.) +fähig sein などいくつかある可能性と共に, Nom. act.+Funktionsverb による受動表現も, Kolb の言う「隠れた受動」である (L 7, 「Nominale Umschreibung による受動表現」の項参照)。Kolb のこの論文はこのタイプの受動表現のみを採り上げたものではないが, 機能動詞構文の時として持つ能動文体による受動表現の本質を知ること, Nom. act. そのものの解明と機能動詞の役割の理解であり, この分野の重要文献として, やはり欠くことのできないものである。

次の 9) 10) は残念ながら未入手である。

- 9) Georg Stötzel : Zum Nominalstil Meister Eckarts. Die syntaktischen Funktionen grammatischer Verbalabstrakta, Wirkendes Wort 1966, S. 289-295
- 10) Wolfgang Klein : Zur Kategorisierung der Funktionsverben, Beiträge zur linguistischen Datenverarbeitung 13, 1968
- 11) Bernhard Engelen : Zum System der Funktionsverbgefüge, Wirkendes Wort 1968, 18. Jg. Hf. 5

Daniels において甚だ不明確であった nom. Umschreibung の定義または限界を明確にしようとするのが, この論文の第一の意図である。しかも Funktionsverbgefüge という時, von Polenz が L 3 で用いた用語に忠実に, 「(Funktions-) Verb+Präposition+Nomen (冠詞あり, またはなし, 場合により前置詞との融合形)」という動詞的コンプレックスに限定している。それにもかかわらず, Funktionsverb を Vollverb と厳密に区別するだけでも, どれほど面倒であるかがわかる。

A. Kriterien zur Abgrenzung の項で Engelen の挙げている判断基準と

いうのは、何と9項目もある。そのうち幾つかを抜抄すると：

1. 完全動詞（例えば stellen）の場合、動詞内容は常に提示されており、他の文肢によって単に精密・修飾化される（例：eine Vase auf den Tisch stellen）に対し、機能動詞の場合は、対応する完全動詞の内容が、名詞部によって殆んど取り上げられてしまっている（例：etwas zur Diskussion stellen）。機能動詞構文の動詞部と名詞部とは、固定した意味単位を形造っており、意味内容の重点は名詞部にある。

一方動詞部は全体としては単に文法的機能を行使するに過ぎず、したがって機能語である。文中において名詞部のとる位置は、分離動詞の前綴と全く同じ関係にある。機能動詞構文の意味内容は、ほとんどその名詞部に含まれているため、機能動詞構文の文章は、その名詞部なしには意味がないか、あるいは別の意味になってしまう。

例：

Er brachte sein Auto im letzten Augenblick zum Stehen.

Er brachte sein Auto im letzten Augenblick. (別の情報となる)

上の場合と異り：

Er brachte sein Auto zum Waschen.

Er brachte sein Auto. (構造は変わらず、情報範囲が狭いだけ)

2. 機能動詞構文の名詞部は、直接尋ねることができない。

例：

Die Verhandlungen gerieten ins Stocken.

\*Wohin gerieten die Verhandlungen? (尋ねられない)

これに反し：

Die Verhandlung führten zu dem Ergebnis, daß . . .

Wozu führten die Verhandlungen? (尋ねられる)

Die Schwierigkeiten lagen in anderen Bereichen.

Wo lagen die Schwierigkeiten ? (尋ねられる)

ただし zugrunde richten のような慣用表現では、もちろん尋ねられない場合がでてくる。

3. 機能動詞構文の名詞部は、代名詞あるいは前置詞付き副詞に替えることはできない。

例：

Sie brachte ihn zur Verzweiflung.

\*Sie brachte ihn dazu. (不可能)

これに反し：

Konnten Sie ihn zum Nachgeben zwingen ?

Ich konnte ihn nicht dazu zwingen. (可能)

4. 前置詞構成部が機能動詞構文の名詞部である場合、通常の完全動詞ならばとれるような方向指示を、もはやとることができない。

完全動詞の例：

Er brachte sein Auto zum Waschen in die Garage.

Er brachte sein Auto in die Garage zum Waschen.

また場所の指示と機能動詞構文名詞部との文脈位置は完全に定まっている。

機能動詞構文の例として：

Diese Mittel standen ihm in Frankfurt zur Verfügung.

\*Diese Mittel standen ihm zur Verfügung in Frankfurt. (不可能)

完全動詞の例：

Seine Erzeugnisse standen zum Verkauf auf dem Markt.

Seine Erzeugnisse standen auf dem Markt zum Verkauf. (可能)

5. (以下省略)

この論文の第2部にあたる B. Reihenbildung では、6系列に分けて機能動詞構文を分類している。

- 系列Ⅰ 前置詞 in (ins) (+kommen, bringen など)  
 系列Ⅱ // außer (+setzen, sein など)  
 系列Ⅲ // in (+nehmen, geben など)  
 系列Ⅳ // zu (zur, zum) (+kommen, bringen など)  
 系列Ⅴ // zu (zur) (+stehen, stellen など)  
 系列Ⅵ // unter (+stehen, stellen)

このように前置詞を主とした分類であり、現われる主要な機能動詞は, kommen, bringen, geraten, setzen, sein, bleiben, halten, lassen (以上系列Ⅰ) など, その変形として stürzen, jagen, ziehen, führen, schweben, treten, fallen, verfallen, ausbrechen, stürzen (以上系列Ⅰ) などである。しかしこの分類では, 同じ in 系統でも動詞によって二つに分けざるを得なくなっているし, zu についても同じことがいえる。筆者の意見としては, むしろ動詞の Aktionsart により次の三系列に分けた方が, 一層明解になるのではないかと思う:

I kommen—bringen 系列 (変種として, kommen には geraten, gelangen, treten があり, bringen には jagen, stürzen, (ver) setzen, ziehen がある。)

前置詞: in, im, ins; außer; zu, zum, zur

II nehmen—geben 系列 (変種は intransitiv の gehen)

前置詞: in

III stehen—stellen 系列 (変種 haben)

前置詞: zu, zur, unter

以上のうち, I, IIについては, durativ な表現に sein, bleiben, halten, lassen, haben も用いられる。IIIでは stehen が stellen の durativ な表現となるが, 他に変種として haben がある。

(いづれにせよ, 初期の Daniels において未だ混とんの感があつた識別と分

類が、5年後になってようやく整然とし始めてきた。

この同じ1968年には、次々と研究論文が公表された。

- 12) Hans Jürgen Heringer : Die Opposition von “kommen” und “bringen” als Funktionsverben, Untersuchungen zur grammatischen Wertigkeit und Aktionsart; Sprache der Gegenwart Band 3, 1968

機能動詞構文を kommen と bringen を構成要素とするものに絞った研究であるが、副題に見られるように、このような機能動詞構文が用いられるのは、特に原動詞の価数 (Wertigkeit) と動作態様 (Aktionsart) を変えるためである、というのが結論となっている。二価動詞の bringen 機能動詞構文により、次の四つの可能性が選択できる。

- |    |         |         |
|----|---------|---------|
| 1. | 機能動詞—能動 | 動作名詞—能動 |
| 2. | ” —能動   | ” —受動   |
| 3. | ” —受動   | ” —能動   |
| 4. | ” —受動   | ” —受動   |

すなわち：

1. man macht, daß jemand (etwas) tut (*ich bringe ihm zum Singen*)
2. man macht, daß etwas (von jemandem) getan wird (*ich bringe die Diskussion zum Abschluss*)
3. es wird von jemandem gemacht, daß jemand (etwas) tut (*er wird von mir zum Singen gebracht*)
4. es wird von jemandem gemacht, daß etwas (von jemandem) getan wird (*Die Diskussion wird von mir zum Abschluss gebracht*)

bringen/kommen 機能動詞による Aktionsart 表現にも詳細な検討が加えられている。この場合 Heringer は、durativ と transformativ とに大きく

二分する方法を採っている。例えば sterben は「死の始まり」として ingressiv なのか、「生きることをやめる」egressiv なのかは、解釈の相違にすぎないが、一つの状態から他の状態への移行であることに違いなく、これを transformativ として統一するのである。ただしこれは Aktionsart が明かに ingressiv か egressiv である場合に、その呼び方を排除するものでない。一価の kochen (das Wasser kocht) から導かれる bringen/kommen による機能動詞構文は、価数・Aktionsart・態・自動他動において多様なニュアンスの表出を可能とする。

Ich bringe das Wasser in 5 Minuten zum Kochen, は<sup>17</sup>egressiv であり、kochen 開始と共に行為は終結する。

Das Wasser kommt in 5 Minuten zum Kochen. では準備段階が強調され、

Das Wasser kommt jetzt zum Kochen. では開始のみが表わされる。

Ich bringe das Wasser jetzt zum Kochen. には多分に durativ な色彩がある。

Das Wasser kam nach 5 Minuten zum Kochen. は Vorgang の開始のみが表わされ、5分後に湯が沸き始めるのであるが、

Ich bringe das Wasser nach 5 Minuten zum Kochem. といったとすれば、5分後の行動開始を言うことになる。その他、Das Wasser wird zum Kochen gebracht. も可能であり、これに二価の kochen (ich koche das Wasser) を加えれば、さらに表現の可能性は増加する。

二価動詞の場合は特に利用範囲が広く、一価または三価に転用できる。すべてがよく用いられる形式とはいえないが、少なくとも、次のような可能性はある (S. 102) ;

1 価	kursiv in Bearbeitung sein 受 動	transformativ in, zur Bearbeitung kommen 受 動
2 価	zur, in Bearbeitung haben, lassen	zur, in Bearbeitung bringen, nehmen
3 価	能 動 bei jm zur Bearbeitung haben, lassen 能 動	受動, 能動 zur, in Bearbeitung geben  受 動

- 13) Veronika Schmidt : Die Streckformen des deutschen Verbums  
— Substantivisch-verbale Wortverbindungen in publizistischen  
Texten der Jahre 1948 bis 1967, Halle (Saale) 1968

資料は1967年まで、と副題ではなっているが、この論文の主体は1966年に提出された学位論文であり、したがってそれ以前に書かれたものであるから、参考文献に挙げてあるこの分野の研究書としては、初期のL3, L4, L5が挙げてあるにすぎない。その割には出版されるのが遅かったことになるが、学位論文の時に集めた8000例の機能動詞構文が、出版時には1967年の分まで含め、11641例に拡大されている（ただし巻末のさく引は8000例のまま）。出典はいかにも東独らしく、社会主義論文の雑誌“Einheit”, 党機関新聞“Neues Deutschland”その他文学書と比較的限られている。

この論文の課題としては、著者の名付ける Streckformen (拡張動詞文形) 用法, 頻度, ある一定時期における普及, 選択的使用に到る可能な動機, とかなり広範囲のものが挙げられている。取扱う対象は, 対応する動詞表現の有無に判別点をおくため, zur Verfügung stellen や Auskunft geben のように単一動詞の対応がないものは省かれ, 巻末のさく引も単一動詞によって頻度順, アルファベット順に分類している。興味があるのは, Polenz や Daniels において暗示的に指摘してあった Aktionsart の問題を, 体系的に取上げようとし

ていることである (S. 34 ff.)。その結果は、例えば (sich) verbinden については次のように示される：

in Verbindung treten	= ingressiv
in Verbindung stehen	= durativ
die Verbindung vollziehen	= egressiv
in Verbindung kommen	= inchoativ
in Verbindung bleiben	= kontinuativ
die Verbindung erhalten	= resultativ
in Verbindung bringen	= kausativ

このような表現形式は、名詞化・細別化という現代ドイツ語の一般的傾向の一部をなすものであり、将来文法のカテゴリーに属するようになることも考えられるとしている。

Streckformen による受動の能動的表現、厄介な再帰表現の放棄、未来形代用などは、従来種々の論文に指摘されてきたが、Schmidt はこれに「格の転換」をも付け加えている。

*er* erhielt nicht einmal die Möglichkeit, seinen Standpunkt zu vertreten : *ihm* wurde nicht einmal ermöglicht, seinen Standpunkt zu vertreten

上の例は受動から能動への転換に伴って生じた主語概念の変化であるが、

*der Mangel* an qualifizierten Kräften hat zur Folge, daß . . . : *aus dem Mangel* an qualifizierten Kräften folgt, daß . . .

この例では主語が一層はっきりと表現されている。第三の例としては、定動詞が変るために、その Valenz 変更に伴う格の変換が挙げられている：

unser Staat gibt *der Kunst und den Künstlern* eine besondere Förderung : unser Staat fördert *die Kunst und die Künstler* besonders

また *es*, *man*, *etwas* という不明確な表現を避けた例が221例あるとしている

るが、例えば es (または man) muß so lange gestreikt werden, bis . . . の代りに、der Streik muß so lange geführt werden, bis . . . とするなどがそれである。

1948年から1967年まで、“Einheit”と“Neues Deutschland”に現われた Streckformen の頻度統計は極めて興味深い。この学術的な雑誌の方では、20年間に Streckformen の頻度が倍増しているのに対し、新聞の方はほとんど変りがない。その代りほぼ同量のテキストについて頻度をみると、“Einheit” 4 ページで1948年 2.9 例、1967年 16.0 例に対し、これに対応する量の“Neues Deutschland”では、1948年 21.0 例、1967年 21.7 例と、新聞の方は増加こそないが、絶対量が圧倒的に多いことが明かにされている。

- 14) Hanna Popadić : Untersuchungen zur Frage der Nominalisierung des Verbalausdrucks im heutigen Zeitungsdeutsch, Institut für deutsche Sprache Forschungsberichte 9, Mannheim 1971

新聞における名詞化という、前掲 Schmidt と同じような対象を扱いながら、研究方法は全く異っている。標題の Nominalisierung des Verbalausdrucks と異り、本文では analytische Verbalverbindungen という用語を用いているが、これは Polenz の Funktionsverbformeln, Daniels の nominale Umschreibungen 以下11種ある呼び方の中から、Elise Riesel の Stilistik der deutschen Sprache, Moskau 1963 に用いられた用語に従ったものである (Riesel は同じ著作の中で verbale analytische Fügungen という表現も用いている)。

その定義も Schmidt より範囲が広く、動詞的名詞または形容詞的抽象名詞と、機能要素と化した動詞との結合とし、必ずしも対応動詞の存在は問題とならない、としている点が大いに異なる。その理由として、例えば in Betracht ziehen は betrachten の意味でなく、erwägen, bedenken あるいは berücksichtigen の意味で用いられる。

sichtigen に代るものであり、また in Vergessenheit geraten は受動の vergessen werden によっても、他の単一動詞によっても表現しえないものをもっている。

これは geraten に「特定の意図なく」という響きがあるためである。

さて資料対象は“Die Welt”の1965年11月1日から30日まで、約500ページである。Popadic は Welt 紙における機能動詞構文の役割を次のように分類している。

### 1. 完全動詞のバリエーションとして

見出しに完全動詞、本文に機能動詞構文を用いた例が多い。恐らく見出しは簡単を尊ぶからであり、本文では見出しとの重複を避けるためであろう。

Überschrift : Ölfirmen *hoffen* auf höhere Heizölpreise

Text : Die erste Kältewelle des Winters hat den Mineralölgesellschaften wieder *Hoffnung* auf etwas höhere Erlöse für Heizöl gemacht.

Überschrift : Exilkroate wegen versuchten Totschlags *angeklagt*.

Text : *Anklage* wegen versuchten Totschlags *ist* gegen den 29 Jahre alten Exilkroaten Stanko Kardum *erhoben* worden.

### 2. 慣用の位置からはずれた配語

新聞においては、読者の眼をひくため、機能動詞構文の名詞を文頭に置いたり (a)、あるいは読者の枠構造文体による緊張感を和げ、読み易くするため、前置句を枠外に出したり〔Ausklammerung〕(b 1)、あるいは名詞部の内寄せ〔Binnenstellung des Substantivs〕(b 2) をしたりする。

#### (a) の例

*Sorge bereitet* vor allem die schlechte Haushaltslage der öffentlichen Baulastträger.

*Einen Fehler machen* alle Anfänger : . . .

*Heftige Kritik* an der Preispolitik der Regierung *übt* der französische Unternehmerverband . . . in seinem letzten Monatsbericht.

(b 1) の例

Diese Regierung *hat keinen Anspruch* auf eine neue Bewährungsprobe.  
Die indische Tennismannschaft *macht sich wenig Hoffnungen* auf einen Sieg.

(b 2)

Das *hat zwar grossen Eindruck* auf die öffentliche Meinung in Indien *gemacht*.

Die Kriegsschiffe *haben Positionen* im südchinesischen Meer *bezogen*.

3. 完全動詞の(物または人の)目的語を省略するのに機能動詞構文は適している。次の場合、もし完全動詞を用いたとすれば、目的語を挙げねばならない筈である：

In regelmäßigen Abständen *sollen Besprechungen stattfinden*. (etwas mit jm besprechen)

Johnson *gab* in den vergangenen Wochen *Anweisung*, die Planung voranzutreiben. (jn anweisen)

Tatsächlich verlangt das geltende Heilpraktikergesetz aus dem Jahr 1939 nur, daß ein Heilpraktiker “glaubhaft macht”, er *werde keinen Schaden stiften*. (jm schaden)

4. 付加語を付けた名詞。形容詞によるものと関係文によるものがある。

eine beachtliche *Änderung* erfahren ; allseitige *Anerkennung* finden ;  
zu einer merklichen *Stabilisierung* führen

最後のような前置詞を伴うタイプのもは極めて稀であり、また前体として形容詞の前に不定冠詞を持つものが著しく多いのが特徴である。

Eine solche Prüfung käme einer gerichtlichen *Entscheidung* gleich, die aber nach dem Grundgesetz nicht ohne Anhörung des Betroffenen *gefällt werden dürfte*.

このようにして、かなり広範な規定を従属文に譲り、本来の文の流れの負担を軽くすることができる。

#### 5. 合成名詞

Maßnahme treffen から、verstärkte Sicherheitsmaßnahmen, ähnliche Vorsorgemaßnahmen, Schutzmaßnahmen, Gegenmaßnahmen, Abwehrmaßnahmen+treffen や、zu noch größeren Sparmaßnahmen schreiten などが造られる。

#### 6. ニュアンスづけ

内容上の意味のニュアンス、または意味は同じで文体的ニュアンスを変えるのに、名詞はそのままにして次のような機能動詞が用いられる。

Auskunft, Auftrag, Unterricht, Zustimmung—geben と erteilen

Gelegenheit, Möglichkeit, Anlaß—geben と bieten

Bedeutung—bekommen, erhalten, erlangen, gewinnen, haben; von Bedeutung sein

Entscheidung—treffen, fällen, vornehmen, herbeiführen; zu der Entscheidung kommen

など多数あるが、中には *Einwende erheben* が既に存在する一方で、*Einwendungen erheben* などという造語をして、しかも両者に何等意味上文体上の差もなく用いているのは問題である、としている。

#### 7. 受動の代用

ここで機能動詞に用いられているのは、finden, kommen, gelangen, geraten, erfahren, erleiden, erfolgen, stattfinden である。

## 8. Aktionsarten

ドイツ語では、すべての動詞を明瞭に Aktionsart に分類することはできないが、少くとも、前置詞を伴う機能動詞構文において、bringen, kommen, nehmen 他いくつかの機能動詞との組合せによって、durativ, inchoativ, konklusiv, resultativ に、それに時により kausativ の色づけをして、生起の時間的経過を種々に表現することはできるとしている。前掲 Schmidt に較べると、この点では消極的である。

巻末の付表も Schmidt と対照的であり、機能動詞構文をあくまで中心とし、その名詞部と機能動詞部に分けてアルファベット順に配列してあるが、もとより Welt 紙一ヶ月分に現われた限りの範囲でしかないのが惜しい気がする。

- 15) Annelly Rothkegel : Funktionsverbgefüge als Gegenstand maschineller Sprachanalysen, Beiträge zur linguistischen Informationsverarbeitung 17, 1969

この論文は未入手。

- 16) Wolfgang Herrlitz : Funktionsverbgefüge vom Typ "in Erfahrung bringen" — Ein Beitrag zur generativ-transformationellen Grammatik des Deutschen —, Tübingen 1973

今のところ最も新しい研究であり、従来の多くの研究を基盤としているだけに、一層精密なものとなっている。機能動詞構文と表面構造が同じ型、「前置詞+(定冠詞)+名詞+動詞」において、Präpositionalphrase (pp) が前置詞目的であったり、副詞規定であったりすると、いかにして識別するかは、先の Heringer でもかなり苦しんだ跡があるが、Herrlitz ではさらに厳密かつ徹底的に、この点が追及されている。例えば否定の位置の置換では、

Herr Müller meint, daß eine Gehaltserhöhung nicht in Betracht

kommt.

\*Herr Müller meint, daß eine Gehaltserhöhung in Betracht nicht kommt.

が成立しないのに対して,

Herr Müller meint, daß wir nicht zum Bahnhof gehen.

Herr Müller meint, daß wir zum Bahnhof nicht gehen.

Mir scheint daß die Bäume nicht im Garten wachsen.

Mir scheint, daß die Bäume im Garten nicht wachsen.

Ich bedauere, daß ich nicht an sie denke.

Ich bedauerse, daß ich an sie nicht denke.

以上はいずれも成立する。ここで in Betracht kommen の一体性が明らかとなるが、これは独立副詞を間に挿入できるかどうかによっても識別できる。

\*Herr Müller meint, daß eine Gehaltserhöhung in Betracht bald kommt.

Herr Müller meint, daß wir zum Bahnhoh schnell gehen.

Mir scheint, daß die Baüme im Garten ausgezeichnet wachsen.

Ich bedauere, daß ich an sie unabläßlich denke.

このような変形による検討が、動詞・前置詞の個々または組合せについて行われている。機能動詞については、例えば in Schwung と組合すことのできる kommen, geraten, sein, bringen, setzen, versetzen, haben, halten, bleiben 他に、組合せのできない stehen, stellen, nehmen 等があるなど、組合せ可能な動詞が形成するグループが存在し、Herrlitz はこれを7群に分けている。stellen, stehen で作る第Ⅳ群, setzen, bleiben, sein が作る第Ⅵ群などである。

後半の生成変形文法的方法による考察の部は省略するが、巻末の文献目録も

6 ページ余にわたり、主として戦後の関係文献がまとめてあるのは、それ自体が貴重な資料である。

——関西学院大学文学部教授——